

令和6年度 学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評
「昌平高校 2大会ぶり栄冠」

報告者：高体連技術委員 庄和高校 野木 悟志

1 大会概要

令和6年度学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会埼玉県予選が6月1日から6月16日の期間にNACK5スタジアム大宮などの会場で開催された。本大会は、プレミアEAST 1校、プリンス関東2部1校、県1部9校、県2部12校、各支部代表23校（東5、西7、南7、北4）の合計46校によるトーナメント方式で実施された。なお、プレミア所属の昌平高校、プリンス所属の西武台高校と関東大会出場の正智深谷高校、成徳深谷高校は3回戦から、関東大会県予選ベスト8の6校（細田学園高校、武南高校、聖望学園高校、立教新座高校、浦和南高校、埼玉栄高校）は2回戦から出場した。

2 大会結果

優勝 昌平高校（2大会ぶり5度目）

準優勝 西武台高校

第3位 浦和学院高校・正智深谷高校

3 大会全般（傾向と特徴）

勝ち上がりを見ると、ベスト8にシード校が6校進出したこと、決勝のカードがプレミア所属の昌平とプリンス所属の西武台となったことから、実力のあるチームが安定した結果を残した大会であったと言える。また、準々決勝以降の試合では先制点を奪ったチームが全て勝利しており、逆転勝利を収めたチームはなかった。その点から一発勝負のトーナメント方式において、先制点を持つ意味の大きさをうかがうことができた。

上位に進出したチームは豊富な運動量、攻守の切り替えの早さ、強度の高い守備、多彩な攻撃を兼ね備えていた。特に今大会は5バック、リトリート、中央を固めるなど守備的な戦術を取るチームが多く、粘り強くゴールを守っていた。そういったディフェンスを崩すために、守備者にとって対応が困難となるサイドを起点とした攻撃からゴールを奪う場面が見られた。そしてサイド攻撃に加え、相手がサイドへ対応してきたことで空いた中央を崩しにかかるなど、多彩な攻撃を仕掛けることができるチームが上位に進出した。大量得点を奪って優勝した昌平は、高いクオリティで多彩な攻撃が展開されていた。

4 チーム分析

<優勝 昌平高校>

昌平は、高校年代最高峰であるプレミアリーグで戦っている経験とそのリーグで上位の順位にいる実力を存分に発揮し、他を寄せ付けない圧巻の強さで優勝を果たした。決勝を含め

た全4試合で18得点、失点はPKによる2失点のみと攻守に安定感があり、チームとしての完成度が非常に高かった。基本システムは1-4-1-2-3であり、個の高い技術をベースにチーム全体でテンポよくパスをつなぎ、ボール保持率を高めながらアタッキングサードへ進入すると、個の仕掛けやコンビネーションプレーを駆使してゴールを量産した。相手守備陣が中央を締めている時には効果的にサイドを使い、相手守備陣がサイドへ人数をかけてきた時には一気に中央を突破するなど、相手に的を絞らせない攻撃は見事であった。攻撃の起点となり、チームを優勝に導く活躍を見せたのがゲームキャプテン MF⑧大谷であった。高いテクニックと戦術眼を持つ⑧大谷はアンカーとしてパスの供給源となり、攻撃のリズムを生み出すプレーに加え、機を見て前線に駆け上がり、自らゴールを決めた。卓越したテクニックとアイデアあふれるプレーから奪った決勝戦の2ゴールは、観衆を大いに沸かせた。また、今大会インサイドハーフ⑦三浦は5得点、FW⑮鄭は4得点と2人でチームの総得点の半分を叩き出し、優勝に大きく貢献した。⑦三浦はオフの動きやスペースへのランニングに優れた選手であり、2列目から絶妙なタイミングでボックス内へ進入し、ゴールを奪った。⑮鄭は、フィジカルコンタクトの強さと高い得点感覚を武器にエースストライカーとして輝きを放った。そして、準決勝・決勝戦では引いて守る相手に対しサイドを有効に使いながら攻撃を展開し、崩しにかかった。3トップの右に左利きの⑩山口、左に右利きの⑪長（決勝は⑨岩谷）を配置することで縦への突破だけではなく、カットインからのシュートやクロスの場面を多く作り出していた。⑩山口と⑪長（⑨岩谷）が流れの中で中央にポジションを取った時には両 SB②上原、⑫安藤が積極的に攻撃参加し、精度の高いクロスで得点機を演出した。守備については、個のボールを奪う意識と強度が高く、チームとしてコレクティブな守備が徹底されていた。特に、ボールをロストした瞬間に奪い返しにいく切り替えが早く、即時奪回に成功し、再び攻撃に転じる良い場面が多く見られた。どの試合においてもボールを保持し、人数をかけて押し込む時間帯が長くあったため、カウンター攻撃を受ける機会も何度か見受けられたが、U17日本高校選抜 GK①佐々木、対人能力の高い CB③鈴木翔を中心に冷静に対応し今大会において流れの中での得点を許さなかった。相手チームから研究や分析され、対策を講じられる試合が続いたが、自分たちのサッカースタイルをピッチ上で表現し続け、圧倒的な強さを発揮し、優勝を成し遂げたことは流石の一言に尽きる。

<準優勝 西武台高校>

西武台は、初戦となった3回戦武蔵越生にPK戦で辛勝、準々決勝浦和南を1-0で下し、準決勝正智深谷に再びPK戦の末勝利と紙一重の接戦をものにする勝負強さを発揮し、決勝に駒を進めてきた。決勝の昌平戦では、自陣にコンパクトな守備ブロックを形成し、相手を意図的に引き込んでボールを奪うと、一気にカウンター攻撃を仕掛ける戦術で臨んだ。試合序盤、狙いとするカウンター攻撃から2度のビックチャンスを作り出したが、フィニッシュワークの精度に欠け、得点を挙げる事ができなかった。その後、CKから先取点を奪われ

ると、技術力で上回る昌平に主導権を握られ、前半だけで3失点を喫してしまい、苦しい展開となった。後半になると、前線の選手が高い位置からアグレッシブにボールを奪いに行く守備に変更し、試合の流れを引き寄せようと試みるが、昌平の多彩な攻撃を抑えることができずに得点を許し、リードを大きく広げられてしまう。それでも最後まで果敢にゴールを目指し走り続ける西武台は、後半アディショナルタイムにFW⑨竹内が自ら倒されて獲得したPKを決めて一矢報いた。今大会、縦に速くボールを出して速攻で崩していく攻撃を志向する中で、キーププレーヤーとなったのがFW⑨竹内と左SH⑩鈴木洸であった。⑨竹内は抜群のスピードと相手DFラインの裏を突く動きが持ち味であり、得点を挙げたり、チャンスメイクしたりと攻撃をけん引した。⑩鈴木洸は推進力のあるドリブルとタイミングの良い裏への抜け出しが魅力のサイドアタッカーであり、準決勝で貴重な先制点をマークするなどチームの勝利に貢献した。守備においては、決勝こそ5失点を喫したが、ゲームキャプテンCB⑤谷口が中心となってDFラインを統率し、コンパクトなブロックを構築しながら強度の高い守備で相手の攻撃に対応した。また、前線の選手が献身的な守備でパスコースを限定し、前向きな状態からボールを奪い、カウンター攻撃を発動するなど「良い守備から良い攻撃へ」とつながるシーンも見られた。3回戦と準決勝のPK戦においては、守護神GK①松田が187cmの長身を生かし、好セーブを連発し勝利の立役者となった。今季のプリンスリーグ関東2部では苦戦を強いられ、なかなか調子が上がり切らないチーム状況で迎えた今大会であったが、インテンシティの高い試合を勝ち抜いていく中で、選手たちがより一層たくましく成長し、チームとしての成熟度が高まっていった。結果として準優勝という成績を残したことは、今後のリーグ戦や高体連の大会にも良い影響を与えていくことであろう。

<第3位 浦和学院高校・正智深谷高校>

浦和学院は、準決勝の昌平戦に攻撃時1-3-2-4-1、守備時1-5-4-1の可変システムの布陣を採用した。ボールを失うと素早い帰陣で自陣にブロックを敷き、DF5枚とMF4枚をバランスよく配置することで相手に効果的なスペースを与えず、ゴール前では人数をかけた守備で粘り強く対応した。しかし、巧みなパスワークと高い個人技を有する昌平に終始押し込まれる展開が続き、人数は足りているがファーストDFの決定が遅れたり、寄せが甘くなったりしたところを徐々に突かれ始め、失点を重ねてしまった。攻撃は自陣から細かくパスをつなぎ、ボランチを経由しながら前進を試みるが、スタート位置が低く、狙いとする攻めの形を作り出すことができなかった。惜しくも準決勝敗退となったが、6大会ぶりに4強進出を果たし、プレミア所属の昌平と真剣勝負ができたことは今後のチームの成長と飛躍につながっていくであろう。

正智深谷は、準決勝の西武台戦に1-4-2-3-1の布陣で臨み、試合序盤からボランチを軸にボールを動かしながら相手を中央に集結させると、サイドへ展開しクロスから決定機を作るが、得点を奪うまでには至らなかった。守備はCBを中心に強固な守備組織を築き、ボール保持者への素早い寄せ、球際と空中戦の強さを発揮し、相手にチャンスを作らせなかつ

た。前半は正智深谷が試合を優位に進めていたが、スコアレスのまま折り返した。後半、選手交代で攻撃に変化を加えてきた西武台に主導権を握られピンチを招く場面もあったが、GK と DF が体を張った守備で無失点に抑えた。互いに攻守に激しいバトルが繰り返される中、試合は 80 分では決着がつかずに延長戦へ突入した。正智深谷は延長前半に一瞬の隙を突かれ失点を喫したが、試合終了間際に CK から土壇場で同点に追いつく驚異的な粘りを見せた。最終的には PK 戦で敗れはしたが、どちらに軍配が上がってもおかしくない試合内容であり、非常に見応えのある好試合であった。今回の敗戦を機に、より一層成長していく正智深谷の今後の活躍に注目していきたい。

5 最後に

今回優勝した昌平は、7月27日から福島県で開催される全国高等学校総合体育大会に出場する。本大会までの限られた時間の中で最高の準備をし、全国の舞台でも昌平らしいサッカーを展開して、全国の頂点に立つことを期待したい。